HOT ホットライン —飛翔45号について— LINE

理想と現実とのギャップ

湊　啓一（1991年度卒　社会科学コース）

先日、久々に実家に帰省した。大学からの封筒が置いてあり、懐かしく思い封を開けた。中に「飛翔」№45が入っており、ほんの数年前まで学生生活を送っていたのが信じられなく感じてしまった。ゼミの後輩である中家君のエッセイにも刺激され、思わず投稿してみたくなった。「飛翔」に投稿するのは2回目である。3回生のとき「旅について思うこと」と題して一人旅のロマンについて書いたのが大学時代に書いた文章で活字になった唯一のものだった。

私が総合科学部に在籍したのは1987年から1991年までである。高校時代、「精神年齢の高い友人と社会の様々な出来事について心行くまで語り合いたい」と、まるで70年代の学生のような気持ちで田舎から出てきた頃を思い出した。「あくまでも高い理想を掲げ、それに向かって努力する事」をモットーにして過ごしてきたつもりの4年間だった。モットーはモットーとして、実際の生活はここでは書かない。（書きたくない）

「飛翔」№45には西条に移転した総合科学部の様子が書いてあった。LL教室には一人一台のMacが置いてあるという。「ばかやろー、俺の頃には狭っくるしい部屋にすしづめだったぞ」と、今Macの購入を考えている自分にはうらやましい限りである。何もかも様変わりしてしまったのだろうかと感傷にひたりながらも、竹原にある実家から車を飛ばして西条に向かった。共通一次（当時）以来の西条キャンパスだ。入り口がどこにあるやらわからず、総科はどこじゃらほいとうろうろするほどの広さに圧倒されてしまった。母校といえば東千田を思い出すのが少し寂しい気がした。

私は今、㈱パスコという地理情報システムの会社に勤務している。広島での生活に嫌気がさして、最初の就職では大阪にいたが、味わったことのない挫折感にさいなまれ、転職し広島に戻ってきた。主に地方自治体向けの固定資産情報システムのデータベース作成に携わっている。友人に今の仕事について尋ねられてもちんぷんかんぷんらしい。「大学時代にフォートランを少しかじってました」と面接ではったりをかましてしまったのがケチのつきはじめで、文系出身の自分には技術屋気質について行けず、毎日が自己嫌悪との戦いである。やりたかったこともさせてもらえず、「国際派のビジネスマンになろう」と勉強した（つもりの？）ことも何一つ役にたっておらず、上司との摩擦もあり、「これが社会っちゅうもんなんじゃろうか」と個人の無力感をひしひしと感じている。あれほど嫌っていた煙草にも手を出してしまった。坂口安吾が「堕落論」で書いたように、人は誰でも堕落してしまうものなのだろうか。

夢を追いかけることは、この無機質的になってしまった社会の中では必要なことだとは思う。たとえそれが虚しい徒労に終わったとしても。総科で学んだことも、自分で本を漁ってやみくもにつけた知識も、いつかは陽の目を見るときがくると信じたい。どうしても耐えられないときは、詩を書く。夏目漱石が「草枕」で書いてたっけ、「どこにいっても住みにくいと感じたとき、詩がうまれ、絵ができる」と。

過ぎ去った日々を思い浮かべて
見たくないものに背を向け
無くしたものを拾い集めて
抱えて行くのは重すぎて

誰かとのしがらみの中で
生きなければならないのなら
俺は俺をさらけ出して
熱く熱く燃えていたい

誰もが見えない渦の中に
巻き込まれてしまうのなら

せめて自分自身見失わずに
歩いていたい

だけど　　この思い　　届かない
この思い　誰にも届かない

こんな詩に、大学時代覚えたギターで曲をつけ、歌ってみるのだ。今はただ、自己表現できる場が欲しい。それだけだ。

△ ▼ △

開かれた大学を目指して

重中義信（生体行動科学コース教授）

わが総合科学部は、20年近くの歳月を経過して、昨年の春にやっと念願の西条キャンパスに移転を完了した。いまでは、この新キャンパスの最高の居住空間で、のびのびと教育に研究にと精を出している。このときに当たって、これからの広島大学が「開かれた大学」であるためには、如何にあるべきかを私なりに考えてみた。

まず、第一に、東千田キャンパスにいたころも、常日頃からこのことがいわれてきていたが、それが実行に移されている感じはなかった。何故であろうか。やはり、このキャンパスは、その周囲が高い塀で取り囲まれ、いかめしい門があるのが一つの要因になっているのではなかろうか。幸いにして、現在の西条キャンパスではこのようなものがなく、極めて開放的である。今後も、決して塀や門を作るべきではないと思うし、物理的に閉鎖された社会を作って欲しくない。

第二に、総合科学部も他の学部が実行しているように積極的に学部の一般公開をして欲しい。年1回でもよいから続けてやれば、これも開かれた大学の謳い文句になること請け合いである。担当者は大変であろうが、コース委員会などで議論し、努力すべきであろう。

第三に、ぶどう池の周辺をもっと整備して野外音楽堂（ボール・ルーム）みたいなものを作ったらどうだろうか。この場所は幸いにして緑に囲まれており、かつ、新キャンパスの中央近くに位置するので便利でもある。夕方からでも、一般市民とともに池の周りに集まって、音楽や各種の芸能を楽しむことができれば最高だと思う。

第四に、博物館とまではいかなくとも、資料館みたいなものをこの新キャンパスのどこかに一つ作ったらどうだろうか。各学部の研究や教育の歴史を一つの建物の中で見ることができればと思うのも、私だけではあるまい。

以上述べてきたことは、特に最近になって思うことで、少しずつでも皆が力を合わせ、実現に向けて努力しようではないか。

▲ ▽ ▲

「図書館のここをこうしてほしい」その後

野村　正人（西図書館事務官）

帰りのバスの中から西図書館をみると、照明がこうこうと点いてひときわ目だっています。ああ大学なんだなあ、みなさんが一生懸命勉強しているのだなあと思うと嬉しくなります。私の好きな景色の一つです。

前号では「飛翔」に図書館のことを特集していただきましてありがとうございました。じっくり読ませていただきました。

閉館時間についてですが、土曜日の利用者が現在100人に満たない状況が続いています。もう少し利用が増えると開館時間延長の主張がとおりやすくなるのではないでしょうか。

また、今年度より、日本語の雑誌については点数を増やすことができました。アエラや週間朝日もあります。それとご要望の「購入希望図書申込用紙」はカウンターに用意しました。既に何冊か購入して書架に並んでいます。

まだまだご不満な点はあるでしょうが、なんとかしてみなさんの学習を応援できる図書館でありたいと職員一同考えていますので、どうか今後も積極的にご利用下さい。

編　集　後　記

◇編集長から◇

「飛翔」の刷新をかかげて2年間奮闘されたactiveな松岡前編集長のあとを若干の不安を胸に引き継いだが、今年は特に、3年生、2年生、1年生とも活発に実働してくれる学生編集委員が多く集まり、議論百出しながらも活気に溢れていたので、新米編集長としては大変助かった。また、長年の懸案事項であった編集室が各方面からのお骨折りで、広報委員会室として獲得できたのも編集活動に大きく貢献した。私自身としては、雑誌編集上の才能は余り持ち合わせていないので具体的なそれらは学生スタッフに任せて、私の役割としては彼らが思い切り自分の持ち味を活かせるように、せいぜいサポートするぐらいのことであった。ともあれ、新米編集長のもとに学生編集委員は良く実働・活動してくれたと思う。この活動が座学ではない実学として、彼らの実践力を養う糧に少しでもなってくれればと期待している。　（早瀬光司）

◆学生編集委員会雑感◆

飛翔編集室が出来た！

これは万年根無し草の飛翔編集委員会にとって、かつてない好待遇だ！

しかし、いざ引っ越してみてしみじみ感じいることは、独立した開放感でも機材の揃った充足感でもなく、これまでいかに飛翔編集委員が居候先に寄生してきたかだ。

使えるコンピューターは4台。しかし、それらを充分使いこなしているとは思えない。プリントアウト用紙は厚生補導係からの戴きものだし、コピーもやはり、その都度厚生補導係へお邪魔せねばならない。

昨年はどうだったかと思い返すと、機材・人材・ノウハウ共に社会科学コース及び松岡研メンバーに片利共生していた。

物資面からみてゆくと飛翔編集委員会始まって以来の快挙も寄生先を松岡研から厚生補導係へ移したに過ぎない。

Special Thanks 松岡研 & 厚生補導係.　（榊原恵子）

総合科学部は20歳になった。20年の道程はそれなりに起伏のあった道程だったと思う。その道程に見合うだけの成果をはたして総科は引き出してきているのだろうか。

来年3月、飛翔は20歳を迎える。過去20年間、46冊の飛翔は何を問い、何を求めてきたのだろうか。

総科の意義、飛翔の意義は、いままでどれだけ問われ、どれだけ答えてきたのだろうか。総科の位置づけ、飛翔の位置づけ共、もはや考えることを放棄してきてはいないか。惰性と慣習にまみれたものなら不要なものではないのか。

いまある全てを破壊する創造性が求められているのではないか。　（八木茂樹）

■編集委員■

☆早瀬光司（編集長：自然環境研究コース助教授）・青木孝夫（人間文化コース助教授）・材木和雄（社会科学コース助教授）・渡邊一雄（物質生命科学コース助教授）

☆頓田武男（厚生補導係長）中村　猛（厚生補導係）灰田純江（自然環境研究コース事務官）

☆榊原恵子（学生編集長・自然環境研究コース3年）・八木茂樹（人間文化コース3年）・岡本　元（人間文化コース2年）・篠崎陽平（地域文化コース2年）・三浦素子（社会科学コース2年）・伊藤美紀（外国語コース2年）・谷渕茂樹（外国語コース2年）・田中裕子（物質生命科学コース2年）・松岡麗子（生体行動科学コース2年）・岩本信治（1年）・小椋聡子（1年）・小野ゆかり（1年）・長谷川誠之（1年）・藤原友晴（1年）・前田賢一郎（1年）

総合科学部の夏

～たとえばこんなキャンパス・ライフ～

大学祭

例年11月に行われていた大学祭。今年はアジア大会開催の関係で、夏休み直前の７月８日から10日にかけて行われた。地域の人々や家族連れの教官の姿も見られ、まずまずの成功ぶりだった。

ただ今大学祭準備中

日数があるのでまだまだ余裕。それでいいのか？

大学祭まで15時間

用意でみんな大忙し。
間に合うのか？

総科茶屋Ⅰ

準備万端。晴れて大学祭当日。
あとは客を待つばかり。

総科茶屋Ⅱ

いらっしゃい。夏の炭火焼きはもう大変。だけど、味も腕もプロ並です。

夏祭の風物詩Ⅰ

両手に花

夏祭の風物詩Ⅱ

06生の手作り風車。
大学祭を飾ります。

夏祭の風物詩Ⅲ

風船釣り：金魚すくいと並ぶ縁日の風物詩を楽しみました。